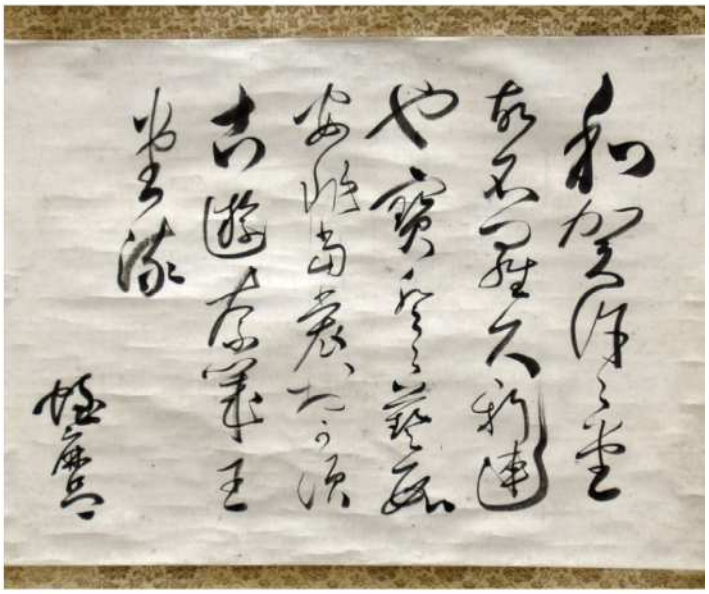
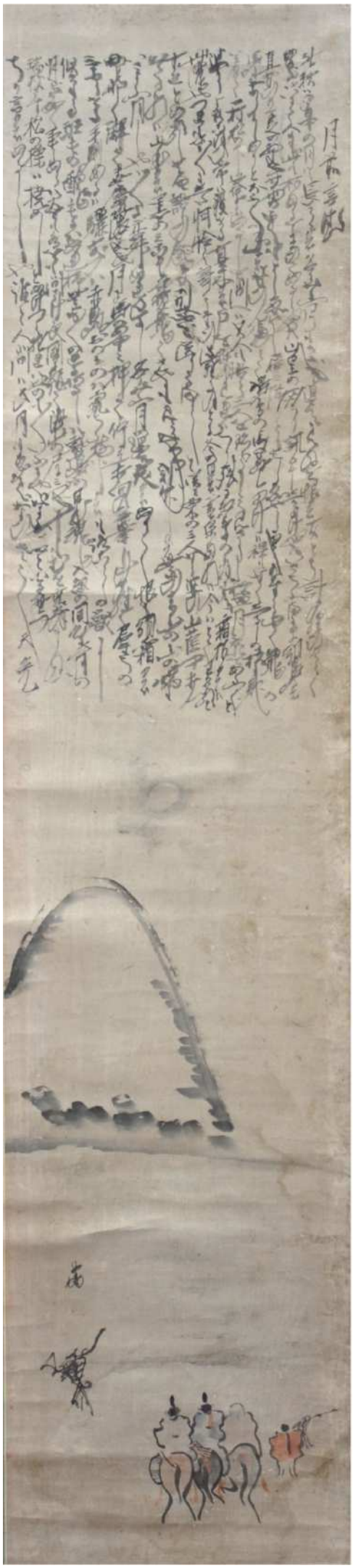




弥富家所蔵資料寄贈記念展

国学 熊本へ

近世後期の熊本は、高本紫溟（たかもとしめい）・中島広足（なかじまひろたり）等、全国に知られるユニークな国学者を数多く輩出した地でした。今回は、さいたま市の弥富鞆彦（やとみともひこ）氏より熊本県立大学に寄贈された肥後の国学黎明期の資料を披露するとともに、特別展観日には、平田篤胤（ひらたあつたね）他、同時代に活躍していた国学者達の墨跡資料を展示します。

期間　平成 20 年 5 月 16 日（金）～6 月 6 日（金）
　　＊ 16 日は特別展観を行います。（裏面参照）
会場　熊本県立大学図書館

主催　熊本県立大学
後援　熊本県
　　熊本県教育委員会

（上）　中島広足和歌幅「和賀許々堂」
（左）　和田厳足長歌幅「此秋は」

特別展示品解説

平成２０年５月１６日

＜掛幅編＞

１　冬ごもり長歌幅（ちょうかふく）　１軸、縦41cm×横56cm、紙本、墨書

書：高本紫溟（しめい）（1738～1813）

儒学者。熊本の人。名順、号紫溟。秋山玉山（ぎょくざん）、藪孤山（やぶこざん）に続いて熊本藩校・時習館の三代目教授として勤めた。その一方で、和歌や和文を能くする国学者としての面を取り上げられることも多く、紫溟をして幕末の熊本における国学興隆の祖とする説もある。

本作は、「しるよししける所のわさいひをよめる長うた」と題する長歌である。内容は、自身に納められた「わさいひ」（早稲米）に対しての謝意を述べるもの。これと同様の長歌が『肥後文献叢書』第２巻所収「高本順大人家集」中に収められているが、その内容にはいくつかの異同が見られる。例えば、最後の短歌が「一とせの心つくしのはやわせをいたつらに我にへすへしやも」とあるのに対し、「高本順大人家集」では「ひとゝせの心つくしの田なつものおほろかにわかにすへしやも」となっている等である。

２　松雪画讃（まつゆきがさん）　１軸、縦100cm×横30cm、紙本、墨画淡彩

画・讃：中島広足（ひろたり）（1792～1864）

国学者。熊本の人。号橿園、蛭麿、黄口など。長瀬真幸に国学を学ぶ。長く長崎を拠点として活動したが、晩年大坂に移る。没する四年前に熊本藩校時習館の国学師範として呼び戻された。

松雪の図に「雲まよふ峰の松原おとさえてあらしの上につもるしら雪」の和歌を配したもの。落款「橿園（印）」。印は「黄口」。

本和歌は『橿園歌集』冬歌に「松雪」と題して入集。広足の画業について弥富破摩雄は、「長崎移居以後、よく其の自画讃物を見るが、伝彩用筆の妙は全く素人放れをしてゐる」（『中島広足』昭和 19 年、p38）と言い、また広足が書簡の中で「今は絵の事打ち捨て侍りつれば」などと書いていることを挙げて、「彼れが絵のことは相応に知られてゐたことが察せられる」（同書 p39）と述べている。

３　杜鵑和歌幅（ほととぎすわかふく）　１軸、縦52cm×横70cm、紙本、墨書

書：中島広足（前出）

「わがここだ　こふらくしれや　ほととぎす　あひだもおかず　こゆなきわたる」を万葉仮名で記したもの。

４　芹画讃（せりがさん）　１軸、縦99cm×横27cm、紙本、淡彩　／弥富家蔵

画：木下逸雲（いつうん）（1799 ～ 1866）

絵師。長崎の人。名相宰（すけただ）、号逸雲、物々子、養竹山人、如螺山人など。日高鉄翁・三浦悟門と並ぶ長崎三大南画家の一人とされる。花芯図・山水図を得意としたという。和歌は中島広足門。

讃：近藤光輔（みつすけ）（1781 ～ 1841）

歌人。長崎の人。代々長崎会所の役人。寛政 12 年に宣長に入門、のち加藤千蔭・本居大平に学び、晩年は香川景樹にも教えを受けた。中島広足と親交があった。

芹の画、落款「木下相宰画（印）」。讃「たつのゐる野沢の水にひくせりの千代のみとりはあらはれにけり　光輔」。

５　観月長歌画讃（かんげつちょうか）　１軸、縦126cm×横27.5cm、紙本、淡彩　／弥富家蔵

書・画：和田厳足（いづたり）（1787 ～ 1859）

国学者。熊本の人。もと弓削氏。長瀬真幸に国学・和歌を学ぶ。嘉永 2 年、冤罪で葦北郡に左遷され、その地で没した。弥富には『和田厳足と其の家集』（大正 15 年）、『勤皇歌人和田厳足』（昭和 19 年）がある。

画は、冬の月夜、草庵に訪れた二人の客を送る主人とその侍童。長歌の後半は、事が起これば決死の覚悟で主君に仕えることを、月の前で誓い合うという内容。反歌「ちか言のあるしや誰と人問は此月にこそおよひさしてめ」。

厳足の書風について弥富は、日蓮宗のいわゆる「髭題目」のようであると形容している（『和田厳足と其の歌集』111 頁）。また箱書、添付の書簡などによれば、本品は昭和 2 年 9 月、熊本県日奈具町園田政太郎氏より購入したことが分かる。

６　海辺名月和歌幅（かいへんのめいげつわかふく）　１軸、縦31.5cm×横44cm、紙本、墨書　／弥富家蔵

書：香川景樹（かげき）（1768 ～ 1843）

歌人。鳥取の人。号桂園、梅月堂。香川影柄（かげもと）の養子となり京都の公家に出仕、のち桂園風の新派を立て多数の門弟を擁した。

「海辺名月といふ事を　肥後守景樹／夜もなほ清きなきさのしら珠はさなから月を拾ふ也けり」。

表紙に「天保十四年表具」。箱蓋の裏書によれば、箱の表書「桂園翁海辺名月のうた」は明治 43 年春、佐佐木信綱が弥富を訪れた時に揮毫してもらったという。

７　萩画賛（はぎがさん）　１軸、縦125.5cm×横27.8cm、紙本、淡彩　／弥富家蔵

画：喜多武清（きたぶせい）（1776 ～ 1856）

絵師。江戸の人。号可庵、五清堂など。谷文晁の門人で独自の画風をなす。

讃：香川景樹（前出）

萩の画、落款「五清堂（印）」。印は「武清」。讃「秋といふゆかりばかりに匂ふらんうす紫の萩の初はな　景樹」。

添付の弥富解説書に、本和歌が『桂園遺稿』上巻に出ること、また文化 15 年 7 月 20 日、景樹が江戸滞留中、備中の人・富山秀資の請により書き与えたものとの考証あり。なお同解説書によれば、明治 40 年購入のよし。

８　桔梗原画讃（ききょうがはら）　１軸、縦27.5cm×横32cm、紙本、淡彩　／弥富家蔵

書・画：加藤宇万伎（うまき）（1721 ～ 1777）

国学者。江戸の人。幕府大番（おおばん）与力。賀茂真淵に師事し、加藤千蔭・村田春海・楫取魚彦（かとりなひこ）とともに県門四天王と呼ばれる。門下には上田秋成がいる。ちなみに戯作者・柳亭種彦（りゅうていたねひこ）の義理の祖父。

桔梗の画に、讃「ものゝふの草むすかはねとしふりてあき風さむしきちかうのはら　宇万伎」。

箱の蓋裏に、「此の珍幅もと坂氏の蔵なりしが、氏の懇望によりて行成卿歳暮の歌切と交換す。時に明治四十四年三月廿日　賓水記」とあり。賓水は弥富破摩雄の号。

９　小沢蘆庵肖像　１軸、縦86.5cm×横32cm、紙本、著色　　／弥富家蔵

画：横山華山（1784 ～ 1837）

京都の人。はじめ佐伯岸駒に学び、のち松村呉春に師事して四条派に転じた。

書：小沢蘆庵（1723 ～ 1801）

京都の人。歌人。冷泉為村門であったが、安永 2 年（1773）頃破門。澄月、伴蒿蹊、慈延とともに平安和歌四天王と呼ばれる。

蘆庵弾琴の図、落款「崋山黄暉三[印]」。印は「華山」。上部に蘆庵より土佐将監宛の書状を貼付する。

添付される旧蔵者・高見祖厚（熊本の人、広足門）の弥富宛書簡によれば、この画はもと蘆庵の同じ冷泉為村門の宇野久兵衛が所望し、襲蔵したものという。またこれとは別に、崋山と土佐将監について考証した井上通泰の覚書、東京帝国大学文科大学より本品の複製が完了したので返却する旨の書簡（明治 42 年 1 月 19 日付）が添付される。この複製は現在、東京大学史料編纂の所蔵（週刊朝日百科「世界の文学」89、2001 年参照）。

なお本品については、弥富著『近世国文学之研究』（昭和 8 年）327 頁に「小澤蘆庵の肖像について」と題する小論がある。

10　案山子画讃　　１軸、縦95cm×横28cm、絹本、墨画　／弥富家蔵

書・画：平田篤胤（1776 ～ 1843）

国学者。秋田の人。寛政 7 年（1795）出奔して江戸で勉学にはげみ、文化 2 年、本居春庭に入門。独自の神道学を樹立。

案山子の画に、讃「古語云、此神者足雖不行、尽知天下之事神也／まさしかる事のしるしは天の下の物識人やとひて知らまし　平篤胤謹画咏（花押）」。「古語云」以下の漢文は『古事記』巻上による。案山子（久延毘古）は、歩けないが天下のことをすべて知っている神様とされる。

古書店の目録からの切り抜き（写真入り）と思われる紙片３枚添付。それによれば、本品とほぼ同一の作品が少なくとも他に２種あったことが分かる。その切り抜きの一つの解説に、もと平田鉄胤が所持していたものを、篤胤遺著刊行資金寄付の返礼として、馬場利助へ贈ったものという。

弥富著『近世国文学之研究』427 頁には篤胤の画について、「拙いが見様によると雅趣がある。丁度彼れが文字に対する見方と同じことである」「予は例の秋田の案山子の自画讃を蔵して居るが、此れは晩年ので、余程落付きがあり、潤ひがある。よく言へば重厚であるから、画としての軽妙の点は見出されぬ。併し絵として見ても、秋成のよりは優って居る」とある。

11　述懐長歌幅（じゅっかいちょうかふく）　１軸、縦28.5cm×横38cm、紙本、墨書　／弥富家蔵

書：鹿持雅澄（かもちまさずみ）（1791 ～ 1858）

国学者。土佐の人。寛政 3 年、68 歳。万葉集の注釈書『万葉集古義』で著名。そのほか語学の分野でも一家をなした。

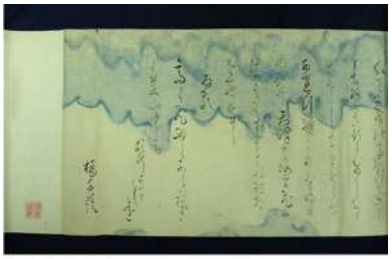
「たふれたる」の長歌を万葉仮名で記したもの。

旧蔵者・水野清雄（高知市東唐人町）から弥富宛の書簡によれば、本長歌は佐佐木信綱の『近世和歌史』248 頁に雅澄の代表作として掲載されるという。また雅澄の書幅の寸法がいつも小さいのは、「翁ハ極メテ貧窮ナリシヲ以テ、始終用紙ヲ経済的ニ使用セラレシ故カ」としている。

＜巻物・冊子編＞

12　長瀬真幸（まさき）先生送別歌巻（かかん）　１巻、縦23.6cm×横1206cm

書：村田春海、加藤千蔭、一柳千古、吉田雨岡ほか16名。



長瀬真幸（1765～1835）は国学者。熊本の人。号田廬、双松園など。本居宣長に国学を学ぶ。万葉研究に業績があり、多くの門人を擁す。暦法・神道・音楽などにも通じた。

真幸は寛政5年（1793）から一年間、江戸に滞在することとなる。これは翌寛政6年4月に熊本へ帰る際、和文で贈られた巻である。江戸において村田春海、加藤千蔭らと交流があったことはすでに知られているが、それ以外にも江戸派の様々な人々が言葉を寄せている。それぞれが自筆であり美術的価値も高いとともに、江戸における真幸の位置を考える上で重要な資料となる可能性がある。

なお村田春海の序は『琴後集』巻11に、加藤千蔭の跋は『うけらが花』巻7に収録されている。

13　長瀬真幸ぬしを送る歌并序（五十鈴川）　１巻、縦23cm×横439cm

書：高本紫溟（前出）

前出の長瀬真幸が寛政 8 年（1796）に、国学者・本居宣長の許へ遊学する際に紫溟が送った文である。これより以前の寛政 5 年に、真幸が初めて松坂へ遊学の願いを出した際に、師であった紫溟は快く送り出したという経緯がある。また、この翌年の寛政 9 年には、紫溟も真幸に同行し、宣長と面会を果たしている。

展示品は紫溟自筆のものであるが、同様のものが中島広足の『橿園文集』に、「鈴鹿川の序」として載せられている。この題は、「歌の詞を以て名とす」と広足が記したように、書末の「鈴鹿川おなしなかれもかはるせをやそ瀬しら浪わけてしらなむ」という歌によるものである。その他、近代に入ってからのものでは、『肥後文献叢書』、『肥後先哲偉蹟』といった書籍に見えるが、題は「長瀬真幸ぬしを送る歌并序」であったり、「送言草」となっている。

ここでは題詞によって書名としたが、本作の箱書きには「五十鈴川」とある。

14　名家色紙等貼交帖　１帖、縦24cm×横21cm、13折

書・画：中島広足、木戸千楯、近藤光輔、香川景樹、有賀長基、一柳千古など。

近世後期の国学者・歌人諸家の色紙・懐紙等 16 点を収録したもの。展示箇所は、「甲午臘八（天保5年12月8日）暁」、長崎丸山の遊郭からの帰り道、思案橋上で立ち話をしている三人の酔客の図および漢詩。「黄口」は「廣足」から「广」と「疋」を省画したもの。

本品にはまた、広足の友人・本間素当（熊本藩士、天保 12 年没、56 歳）のほか、小山川蔭（熊本藩士、明治 29 年没、81 歳）、吉永千秋（藤崎八幡宮社司、明治 37 年没、87 歳）、羽田真足（熊本藩士、明治 36 年没、88 歳）ら、真幸および広足に学んだ郷土歌人の筆跡も収録されている。

15　名家短冊帖（めいかたんざくぢょう）　１帖、縦37.5cm×横14cm、14折

書：中島広足、落合東郭、井上文雄、岡田顕忠など。

近世後期～明治期歌人の和歌短冊を集めたもの。計 108 枚を収録。ちなみに弥富の短冊収集は著名で、『短冊ものがたり』（大正 7 年）などを著し、短冊の歴史やその鑑賞方法などを説いている。

16　和字正濫抄（わじしょうらんしょう）　5巻5冊　元禄8年（1695）刊　縦23.3cm×横16.2cm

著者：契沖（けいちゅう）（1640～1701）

真言僧・歌学者。加藤家の家臣、下川家の末裔。24歳の時、阿闍梨位を得、以後大坂で仏典研究、および歌書の考究に勤しむ。その実証的な研究が認められて水戸光圀より招聘されたが、ついに応じることがなかった。

契沖は元禄8年に『和字正濫抄』を著し、当時の文壇における仮名遣の規範であった「定家仮名遣」の修訂を行った。契沖の研究は、中国音韻学や悉曇（しったん）（サンスクリット語）学の知識を援用するとともに、信用のおける古文献の用例を博捜し、帰納的に古代の仮名遣を推定したもので、国学の基礎である実証的な語学研究の先駆けをなす業績といえる。

展示部分では、「治」の仮名遣について、奈良時代成立の『万葉（集）』や平安時代前期成立の『和名（類聚抄）』の表記例が「をさむ」であることを指摘し、「おさむ」と書いてはならない旨を記している。なお、「定家仮名遣」の伝書である『仮名文字遣』は「おさむ」を正用としている。

17　万葉集略解（りゃくげ）　20巻31冊　安政3年（1856）補刻版　縦25.8cm×横17.8cm

著者：加藤千蔭（1735～1808）

国学者。江戸の人。号荒園、芳宜園、耳梨山など。幼時は父に、少年時は賀茂真淵に学び、同門の村田春海と共に江戸派の双璧をなす。

万葉集の注釈書。寛政三年（1791）起稿、同八年八月脱稿。同年から文化九年（1812）にかけて順次刊行された。

本書には欄外に、長瀬真幸・中島広足ほか、近世後期諸家の考説が書き入れられている。識語によれば、書き入れをしたのは会田安昌（明治 28 年没、64 歳）で、帆足長秋、および中島広足所蔵本を転写したものという。

18　万葉集佳調　2巻1冊　寛政6年（1794）刊　縦18.8cm×横12.2cm　／個人蔵

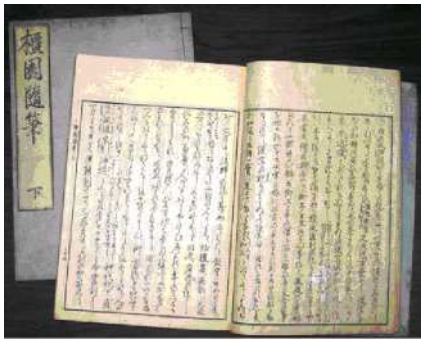
著者：長瀬真幸（前出）

真幸が生前に刊行した唯一の刊本。いわば万葉集のアンソロジー。 加藤千蔭、本居宣長、村田春海といった錚々たる面々が序跋を寄せている。刻師は井上清風。刊記には「肥後州　尚古堂蔵版」とある。「尚古堂」は続編（寛政 11 年刊『万葉集佳調拾遺』）の刊記にも名を連ねる、熊本の橘屋清蔵か。

本書は明治までよく読まれ、京・江戸の書肆が連名で刷り出した後印本も多い。参考として展示しているのは京都・出雲路文次郎、東都・岡田屋嘉七の後印本。

19　檍園随筆　2巻2冊　嘉永7年（1854）刊　縦25.8cm×横18.5cm

著者：中島広足（前出）



江戸末期の歌学書。歌語の考証や歌評、文法のほか、一般評論などを述べたものである。「水乞鳥」「百千鳥」「喚子鳥」「稲負鳥」をはじめ、『檍園文集』に収めた以外の 31 編を上巻に、「かげろふ」「山あゐ」などの 32 編を下巻に収める。広足の歌論の基本的立場を窺える文も多く、幕末期の歌壇を展望することができる。

＊展示品は特に明示しない限り、すべて熊本県立大学の所蔵である。

＊執筆責任者、および所属は以下のとおりである。

展示品番号2～11, 14, 15, 17, 18＝川平敏文（本学准教授）
16＝米谷隆史（本学准教授）
1, 13＝柿本加奈（本学大学院修士課程修了生）
12, 19＝佐方章子（本学大学院修士課程 2 年）